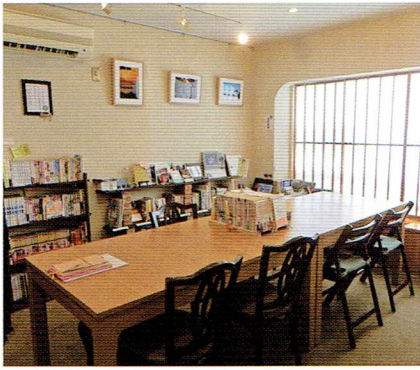


倉の本が家にはたくさんあるのに、ついでまた買ってしまおうとか、もっと深く鎌倉を知りたいという人たちが情報交換できる場所がないとか。そんな活用のアイデアをオーナーに提案しながら、いつの間にか「僕にやらせてもらえませんか」と伝えていた。

オーナーの了解を得たものの、失業の身でお金はない。そこで、街づくりNPO時代に縁のあったクラウドファンディングに頼ることにした。クラウドファンディングは、提案した事業に共感した人から資金の寄付を募るインターネットの仕組みである。その結果、60日間で109人もの人たちから84万円の資金を調達することができた。

寄付してくれた人の半数はまったく面識のない人。なかには、佐



蔵書室は大きな障子窓の明るい雰囲気



本棚は寄付の蔵書で満杯状態

世保や三重など、鎌倉には簡単に来られない人までいた。鈴木さんの事業の仕組みや鎌倉に関心があったのだろう。また、会社と自宅以外のサードプレイスを探していた人もいた。この人は5万円を寄付してくれた。

こうして、10年間借り手がなかった場所は、2015年8月、「かまくら駅前蔵書室」、通称「かまぞう」として生まれ変わった。

入会条件は鎌倉本の寄付

事務所の内装にはほとんど手を入れていない。趣味人のオーナーのおかげで、障子風の飾り窓やスポットライト、ピアノまで備えてあった。それが落ち着いた雰囲気を作り出した。

「かまぞう」の会費は年間1万円。利用料やお茶代は無料だ。ただし、入会の条件は、1年以内に鎌

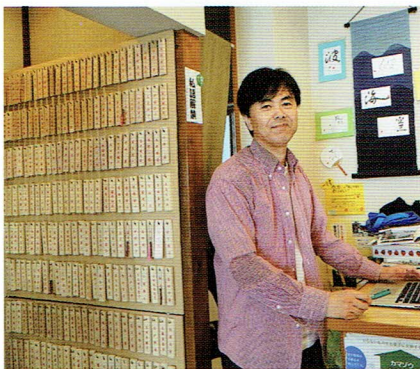
倉の本を1冊以上持つてくること。

最初は苦しかったが、1年経ったころからマスコミでの紹介もあり、少しずつ会員が増えていった。3年目の今、会員数は約250人に。やっと食べていける感じだ。

入り口には全会員の名前が書かれた名札が掲げられている。来た人は自分の名札をひっくり返して入ってくる。会員であることの特別感と満足感を覚えることができ、あの人が来てるんだなということも分かる。なかなか効果的な方法だ。

モットーは、私語厳禁ならぬ「私語解禁」。会員同士の輪をどんどん広げて、協力関係を築き、さまざまなプロジェクトが生まれる場所にした。実際、そういう例がたくさん生まれ出した。

たとえば、美術館や博物館に行



受付の後ろには全会員の名札ボードがある

ガイドツアー活動をやっている女性がいた。しかし、うまく紹介できず、人も集まらない。鈴木さんと「きちんと理解してもらおうにはホームページがないとだめですね」という話をしていた。すると、目の前に座っていた男性が「ウェブを作ってるんですけど、やりましょうか」と言ってくれた。

完成したホームページを見た他の会員が協力したいと言いつつ、「博物館に連れていく日には写真係になります」とか、「私は何もできないけど、親子で参加します」というように、輪が広がっていった。

個人が主催のワークショップも開催している。オープンは12時からなので、午前中の時間を貸し出すことにしたのだが、なかなか使ってもらえない。そんなとき、テ



ピアノの上は、会員の著作の本棚に